
男装伯爵とメイド

橘 紀子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

男装伯爵とメイド

【Nコード】

N68180

【作者名】

橘 紀子

【あらすじ】

私は、今日から身代わりになる…。かつて王妃候補と言われた公爵令嬢。

しかし状況は、ある夜に一変する。

とある惨劇から変わってしまった令嬢。そしてその時また同時に、少女の運命の歯車も回り始める。

数年後、男の伯爵として諜報部で活躍するジュリエットは任務中に

思わぬトラブルに巻き込まれる。あの男との出会いは、そこから始まった。

(ハッピーエンドで終了する予定です。)

ただいま章構成を大改訂しました。

プロローグ(前書き)

初の異世界モノに挑戦です。

プロローグ

これは、異世界マツシユルのある大陸の物語。

7つの強国と、15の小国からなる世界。

なかでも最強2国と言われたメレヌス帝国とメソポタ王国のお話。

「ジュリエット、今日から君は私の妻になってもらう。」

ジュリエットに向かってそういった男はジュリエットが信頼して全てを打ち明けた男であった。しかし、男がジュリエットにさらしていた姿は全て偽りであった。ジュリエットは、男を愛していた。そして男もまた狂おしいほどジュリエットを愛している。しかし、決して2人は結ばれてはならない。特に、男の正体がわかった今となっては…。

夜明け

「陛下、お誕生日おめでとうございます。」

次々と延臣達の挨拶を受けているのは、大陸有数の大国メソポタ王国国王ダニエルである。最初はうれしそうに彼らの挨拶に答えていたが、次に発せられた一言で顔をしかめた。

「お世継ぎの誕生が待ち遠しいですねえ。」

とある小国の大使が発した一言、この言葉こそが国王がもっとも聞きたくない言葉であった。

「もうよい、下がれ。」

かろうじて怒りを抑えてダニエル国王は使者を下がらせた。

この状況を見てメソポタ王国の貴族達は自分もとばかりを受けたらたまらない、と少しずつ国王と距離を置こうとする。

それに比して、国王に向かって歩いてくる男が2人いた。

その2人の姿を見かけるや否や国王は顔を明るくして叫んだ。

「おお、ロベルトとミシエルか。元気にしておったか？」

2人のうち、壮年の男性を見て国王が話しかける。

「ええ、陛下、ミシエルは、アジアン公国の大使と、そして私はメシヌス帝国の大使と話していました。お伺いするのが遅くなってしまう、申し訳ありません。」

壮年の男性が答えた。

「ロベルト、陛下などと堅苦しい方はよしてくれ。昔のようにダニエルさんと呼んではくれないか？」

ダニエル国王は、壮年の男性に懇願するような視線を向けながら言う。

「今日は、あなたの誕生日とはいえ、公式行事です。あなたの威厳を壊すような発言は避けたいのです。あなたは大陸一の国メソポタ王国の国王なんですよ。」

そう、ロベルトはダニエル国王をたしなめた。

「陛下、お誕生日おめでとうございます。」

ロベルトの隣にいた少年が、突然ひざまずきお祝いを申し上げる。

「ああ、ミシエル、ありがとう。そなたも今日来てくれたのだなあ。ありがとう。」

ダニエル国王はうれしそうにお礼を言った。

「陛下、お誕生日おめでとうございます。」

「ありがとう。」

今度は、ロベルトがお祝いを言われ、ダニエル国王は嬉しそうにお礼を言った。

これは、メソポタ王国のとある一日の話。

その夜、先ほどロベルトと呼ばれていた壮年の男、ミシエルと呼ばれていた少年、そしてここで新たに登場したアローという老人の三人が王宮のとある一室で密談をしていた。

「王妃様は、もう長くない。次の王妃をもらわなければ…。」
アローとい老人が口火を切る。

「いえ、次の王妃は見つかるでしょう。しかし、お世継ぎができる可能性は薄いでしょう。今までのことを考えると、王様は御子を作ることが出来ないから体なのでしょう。」

ロベルトがお茶をにごしながら答えた。

「それに、このまま行けば、王位争いになることは必至です。それはなんとしても避けなければ！」

ミシエルという少年が机をたたく。

「せめて、本物のミシエルが生きておればのう…。」

「…。」
「…。」

アロー老人の言葉に2人は言葉をなくしてしまい、部屋には沈黙の気配が漂う。

翌朝、ミシエルはいつもと同様メソポタ王国王立軍の宿舎に向かう。

「カイル將軍、おはようございます。」

ミシエルが宿舎の前に立つ大柄の男に挨拶をする。

「おはよう、ミシエル大佐。今日も朝早くから元気でなによりだ。昨日は、ローゼン外務大臣と一緒に国王陛下と楽しそうに話したそうでないか。国王陛下も義弟と甥っ子の姿を見てとても喜んでいたと、國務大臣が昨日ばやいていたよ。」

「カイル將軍も昨日の、宴に参加されていたのですねえ。將軍は、こういう場は苦手だと思っていましたが……。今度から僕の代わりにパーティに参加してくれませんか？公式行事ならともかく、貴族達の開くパーティーに参加する暇が今の僕にはありません。」

「国王陛下お気に入りの甥っ子の代わりが俺に務まるかよ。ローゼン伯爵は、社交界で薔薇の君と呼ばれ、多くのご婦人がたから熱い視線を送られている。お前の代わりが俺じゃ、きつと貴族の令嬢の方が拍子抜けしてしまうぜ。たのむなら、フランスに頼めよ。」

「フランスに頼むのは、少し……。」「
ミシエルが嫌そうな顔をした。」

「將軍、代わりに行ってくれますか？」

「フランツが苦手なのか？あんな、いい人は今時本当に珍しいよ。しかも頭が切れるし、優しいし。男の鏡見たいな男だぜ。名門フアーンベルグ公爵家の嫡男で伯爵、祖母が当時の国王の妹でフアーンベルグ公爵家に嫁いできたというわけだから国王とも縁戚関係にあるし。しかも、それを鼻に掛けず身分に関係なく人と付き合っている。」

まあ、ミシエルもそうだけどなあ。まあ、ミシエルは親が親だからわかるが、あいつの親はちよつと……。」

カイル將軍はそこでため息を着いた。

「まあ、この話はここまでとしてメレヌス帝国の大使はどうだったんだ。親父さんが大使と話していただろう。」

カイルが話題を変えてきた。

「新王が即位して、早3年ますます強国になっているようだ。周辺の小国も飲み込まれつつある。今後は今以上に警戒が必要だ。」

ミシエルが真剣に答える。

「まあ、軍部の方は任せてくれ。強化してみせる。情報部のお前たちからの情報もあてにしているぜ。」

「近いうちに、スパイを放つ。後、私もしばらく潜伏することになると思う。」

「……。」

「まあ、いわゆる王位争いの余波を避けるためだ。私がいる限り国王に後継ぎがいなくてもこの国の平穩は保たれる……。」

ミシエルが答えた。その後カイルは口をつぐんでしまった。

しばらくすると、朝礼用の鐘がなり、2人は急いで広場に向かった。

夜明け（後書き）

さっき、カレーを食べました。カレー、おいしいです。

夜明け2

その後、ローゼン伯爵ことミシエルはカイル將軍に強引頼んで今回の夜会に代わりに出席してもらうことに成功した。まあ、代償は高くついたが…。

ミシエルは、夜会に参加しないわけではない。ただ、ローゼン伯爵としては参加するつもりはないだけである。

ミシエルは、自宅に帰ると今夜の夜会に参加する父ロベルトが支度を終え、家を出る寸前のところだった。

「父上、今夜の夜会では計画通りに。」

「ああ、そなたもそのように計らうように。」

そう、ロベルトは言うとそのまま侍従を連れて出て行った。

そして、その夜の夜会はミシエルや父ロベルトにとって思わぬ事態を引き起こすのである。

「フ란ツ、今日は付き合ってくれてありがとう。」

カイル將軍は、結局フ란ツを連れて、ワーレンベルグ子爵の夜会にやってきた。

「いいや、かまわない。君の力、もといローゼン伯爵の手助け出来て幸いだよ。」

「ローゼン伯爵は、父親のローゼン侯爵、いやローゼン外務大臣のお手伝いで忙しいようだ。」

ミシエルが情報部にいることは極秘なので、カイル將軍はフ란ツに情報部の仕事が忙しいとは言えなかったのである。

「それに、彼の祖父ローゼン公爵は、宰相を務めている。その仕事も、ミシエルは手伝っているのではないか？」

「そうかもしれない、ミシエルはあまり俺に公務について語らないしなあ。」

夜会はまだ始まったばかりであった。

「今日の夜会にはあの方が来る…。」

ワーレンベルグ子爵は、メレヌス帝国からくるとある要人について思いを馳せていた。

その要人は本来なら決してこの国に足を踏み入れることが出来ないはずの人だった。

「失礼します。旦那さま、皆さまが下でお待ちになっています。」

「ああ、わかった。」

そうワーレンベルグ子爵は、その時自分呼びに来たメイドを一瞥した。黒い髪に茶色の目、あまり見たことないが端正な顔立ちだ。最近入ったのだろうか…。

「ああ、そうだ！あのメイドなら使えそうだ。」

ワーレンベルグ子爵は、突然思いついた秘策に目を輝かせた。

そして、一方廊下を歩く先ほどの侍女の方はと言うと、ワーレンベルグ子爵がこれから迎える要人の事を考えていた。

「さて、いったい何する気なのか？物騒なことが起きなければいいが…。」

そう心配するメイドは、今日自分が参加できなかった夜会の事を思い浮かべた。もちろん、夜会に出たかったわけでない。しかし、今のようなメイドのお仕着せをきてこんな成金趣味の夜会に出たかった訳ではない。全ては、国王陛下のために…。情報部の格言を思い浮かべながらメイド、ことミシエルはため息を着いた

陰謀

「そういえばカイル將軍、今日は何のパーティーなんだ？」

フランスことファーンベルグ伯爵が、軍服を着たカイル將軍と話していた。

「ワーレンベルグ子爵の娘の誕生日みたいだぜ。」

「ワーレンベルグ子爵の娘？」

「そう、ワーレンベルグ子爵の娘と言えば黒い髪に茶色の目をした少女だよ。かわいい子だよ。覚えていないか？」

「ああ、だって最後に見かけたのは3年前だ。今は、病気で田舎で養生していると聞いたが…。」

「そろそろ、社交界シーズンだからお披露目するつもりなのだろう。あまり、遅くなると嫁ぎにくくなるしなあ。」

カイルがそういうや否やワーレンベルグ子爵は、大広間にやってきて1人の娘を紹介した。すると同時に、広間がザワザワし始めた。

「あの娘が、あの男の娘か…。」

そう、娘をじつと見つめる男がいた。

「あの娘は、何なんだ。」

カイル将軍が、突然ワーレンベルグ子爵と現れた彼の娘について初めて発した言葉がこれであった。

「まあ、君の言いたいことはわかるよ。あの、仮面では顔が全くわからない。ワーレンベルグ子爵は、婿候補を探しているのではないのか？」

フランツも不思議そうに少女を見ていた。

ロベルトもその様子を別の場所から見ている。

子爵は今日何をするつもりなのか…。

今回の夜会の主催者であるワーレンベルグ子爵がメレヌス帝国と密通しているという情報を入手してきたのは、メソポタ国に潜伏している情報部の人間である。メソポタ国とメレヌス帝国は、ともに大国で隣接しているわけではないが、両国ともに一番近い大国はお互いである。この2国は基本的に仲が悪く間の小国を巻き込んで時たま戦争をおこすこともあった。現在は、休戦中である。しかし、相手の国に放ったスパイの活動は戦時下以上に活発である。両国共に相手の動きを警戒するとともに、相手国の貴族とつながりを持ち、

情報を横流しさせようと情報部は必死である。さらに、逆に自国の貴族の裏切りを阻止することも情報部の仕事である。

「こんにちは、ローゼン外務大臣。」

「こんにちは、ワーレンベルグ子爵。お嬢さんに久しぶりに会えますかねえ？」

ロベルトが考え事していると、ワーレンベルグ子爵が話をかけてきたので、とっさにロベルトは、今日の主役のワーレンベルグ子爵令嬢の話もちだした。

すると、ワーレンベルグ子爵はお茶を濁しながら答えた。

「まだ、娘は世間に不慣れで今日ももう退出しました。ローゼン外務大臣には、また次の機会にお会いできるとおもいますよ。」

と、歯切れが悪そうに娘の話題を転換した。

そして、ロベルトは、その時はじめてワーレンベルグ子爵令嬢が広間からいなくなったことに気付いた。

その頃…。

ワーレンベルグ子爵の令嬢は、とある部屋にいた。そして仮面を外し、先に来て出された紅茶を飲んでいる自分と同じ黒い髪に茶色

の目をしたメイド（ミシエル）に笑いかけた。

「あなたには、私の身代わりになってもらっわ。」

「どっついうことですか？」

そう、答えるミシエルは、自分の体にふらつきを感じ、立っているのがやっとの状態であった。

「あなたには関係なことよ。ただ、父は3年前にある密約をし、その約束の継続の証として、私を人質に差し出す約束をしていたの。でも、私は行きたくなかったわ。行ったら、愛人にされて一生檻の中から出れないの…。」

おしゃべりが過ぎたみたい。それよりあなたは本当にただの侍女？先ほど出したお茶には睡眠薬が入れてあって普通の人ならとっくに眠ってしまったているはずよ。」

その言葉がミシエルが聞いた最後の言葉だった。その後、ミシエルは、深い眠りについた。

ワーレンベルグ子爵令嬢はその後すぐに自分の来ている服と同じ服を侍女に持ってこさせ、ミシエルを着替えさせた。そして、子爵令嬢のベッドの上に寝かされた。

ワーレンベルグ子爵令嬢が部屋を出て行った数分後、ワーレンベ

ルグ子爵とある男がこの部屋に入ってきた。

「この娘が、おまえの娘か？」

先ほど広間で娘を見ていた男が、ワーレンベルグ子爵に尋ねた。

「はい、私の娘です。ワーム男爵、私はあなた達を裏切りません。その証としてこの娘を……。」

「わかった。では約束通りこの娘をメレヌス帝国の後宮に連れて行く。」

「わかりました。しかし、こちらにも一つかなえていただきたい条件があります。離れて暮らす娘に護衛と自分専用の侍女をつけて連れていかせたいのです。よろしいですか？」

「うん。まあ、いいだろう。ただし、その者たちが裏切りを行った場合、お前とともに始末する。覚悟しておけ。」

「承知しました。」

「最後に、この娘を連れて2時間後に出立する。それまでに、準備をしておくように。」

「はい。……。」

そう、ワーレンベルグ子爵がつぶやくや否や男は部屋から出て行った。この男ワーム男爵について、ワーレンベルグ子爵自身も良く分かっていない。ただ、今日見える予定であったあの方の部下の1人であることは確かである。ワーレンベルグ子爵は、娘の入れ替わ

りがワーム男爵にバレなかったことにほっとした。あの方に逆らうことはおそろしい。例え、それはこの国の国王陛下に反旗をひるがえすことになったとしても…。

陰謀2（前書き）

久しぶりです。

陰謀 2

夜会から一か月後、いつまでも帰ってこないミシエルをロベルトは心配していた。

ワーレンベルグ子爵邸に潜ませている他の諜報員に聞いてもミシエルの居場所は検討がつかないようだ。みな、あの夜会の夜以降ミシエルを見ていないという。何かあるとは思っていたが、まさかミシエルが行方不明になるとは…。

確かにあの子は本物もミシエルではない。しかし、あの子は私のかわいい…。

そう思っていた矢先に突然知らせがきた。それは、本物のミシエルの乳母であったものからだ。

その頃、ミシエルことローゼン伯爵は、アジアン公国のある御屋敷にいた。

「ワーム男爵、私が今日お会いするのは、メレヌス帝国の宰相パールバン公爵であられるのですね？」

ミシエルは、自分をここに連れてきた男、ワーム男爵に尋ねた。

「はい。パールバン公爵は、メレヌス帝国皇帝カイルの右腕で強力な権力を持たれている方である。くれぐれも粗相のないように気を

ください、マリアさん。」

マリアは、ワーレンベルグ子爵の娘の名前である。ここでの、ミシエルはワーレンベルグ子爵の娘ということになっている。ワーム男爵は黒い髪に切れ長の目を持ち、エメラルドグリーン目の男である。彼は腰に剣をぶら下げ、全身に漆黒のアジアン公国の軍服をまとっている。彼は、アジアン公国の軍人なのだろうか？そんなことを考えながら、ミシエルはワーム男爵と会話を続ける。

「わかりました。そして、私はパールバン公爵とともにメレヌス帝国の後宮に向かんですよね？」

ミシエルは、メレヌス帝国からつれてきた侍女アリアと護衛のジョセフから聞いた話をもとに答える。この話をきいて、実はミシエルはほっとしていた。メレヌス帝国の後宮には、ミシエルの部下であるメレヌス帝国の諜報員が何人が潜伏している。彼らの力を借りればこの状況から脱出できはずあじあんである。ミシエルははやく後宮に行きたくて待っていたのだ。しかし、ミシエルの期待は見事裏切られることになるのである。

ワーム男爵との会話の後、ミシエルは部屋に戻ってパールバン公爵に会う支度を赤毛の侍女アリアとしていた。

「ジュリエット様、後宮に行けば私達も一緒にメソポタ王国に帰れるのですよね。」

アリアは、そついいながら期待をこもった目でミシエルを見た。アリアは、ミシエルとここにつれて来られたことを嫌がっていた。

メソポタ王国に帰りたいたいと同じ思いを共有してアリアと仲良くなったため、ミシエルは、侍女としてつけられたアリアに事情を嘘を交えて話した。本当のことを全て話すわけにはいかない。彼女は、最初ミシエルを本当のワーレンベルグ子爵の娘だと思っていた。だから、自分の本当の名前がジュリエットであることと、メソポタ王国で諜報員をしていること、今回ワーレンベルグ子爵に潜入捜査をしている際にだまされて、彼の娘に仕立て上げられたこと、メレヌス帝国の後宮には自分の仲間がいることなどを話していた。

その後しばらく、ミシエルは先ほど呼ばれた名前、自分の本当の名前であるジュリエットと呼ばれていた頃について思いを話していた。

ああ呼ばれていた頃は、なんと楽しかったのだろうか！

あの惨劇がなければ私はミシエルのふりをして男装することも口ゼン伯爵として諜報活動することもなく、ずっとジュリエットでいられたはずだったのに！

要人（前書き）

これから、ミシエルは本名ジュリエットで書いていきます。

要人

メレヌス帝国の宰相パールバン公爵は、ジュリエットのいる隣の屋敷でこれから自分が会いに行く予定の少女の事を考えていた。本当は、ただの人質にすぎない少女であった。しかし、あの方に気に入られたからにはこれからの人生は平凡には行かないに違いない。どんな子だろう？後宮のいかなる花もあの方の心をとらえることはできなかつたのに…。

数刻前、ジュリエットにワーム男爵と名乗った男が、パールバン公爵のいる部屋に入ってきた。ワーム男爵が入室やいなやパールバン公爵はワーム男爵を上座に案内した。

「帝国の方に、何かかわったことは？」

ワーム男爵が、パールバン公爵に尋ねた。

「何もおかわりなく。とまでは、申せませんが今の所目立った動きはありません。」

パールバン公爵が答えた。

「ところで、後宮に入る予定の新しい人質だが…。」

ワーム男爵が、言いにくそうに話し始めた。

「メソポタ王国のワーレンベルグ子爵の娘マリアのことですか？彼女なら、後宮のDランクの部屋に入室する予定です。一樣あなたの側室の1人として後宮に入るはずですから、それなりの準備はする予定です…。どうかなさいましたか？」

パールバン公爵は、いつもと違って歯切れの悪いワーム男爵を見ながら心配そうに答えた。

「そのことだが、彼女はしばらく後宮には連れて行かない。ここに匿っておこうと思う。」

「…。」

「自分でも、なぜこんなことを言い出したかわからない。ただ、あの子は後宮に向いていないと思う。それに、見ているとなぜか気になるんだ。一緒にいると落ち着かないし…。」

「冷静沈着で、思慮深いメレヌス帝国の皇帝であるあなたの落ち着きを失わせる女性ですか…。面白い、是非後宮に連れていきたいところですが…。今回は、あなたの意見を尊重し、しばらくこの屋敷に匿っておきましょう。ワーレンベルグ子爵には、娘マリアは後宮に入ったとお知らせしておきますが…。」

パールバン公爵が、笑いながら答えた。

+ + + + + + + + + + + + + + +
+ + + + + + + + + + + + + + +

黒い髪に茶色の目…。

今のジュリエットはそう見える。

ジュリエットは、自分の姿を鏡で見ていた。本来の私は、本物のミシエルと良く似ていた。

ミシエルは、金髪で海のような青い目をしていた…。

「パールバン公爵が、屋敷に到着したようです。」

侍女のエリアが、ジュリエットにパールバン公爵の到着を知らせてくれた。今から自分が会うのは、メレヌス帝国の宰相パールバン公爵。直接の面識はないが、非常なやり手の男だと聞く。こちらの事情がばれないように気をつけなければ…。

「ごきげんよう、閣下。メソポタ王国のワーレンベルグ子爵の娘、マリアと申します。お会いできて光栄です。」

ジュリエットは、かつて習ったメソポタ王国式の貴婦人の礼をとる。

「こんにちは、マリア嬢。こちらこそ、お会いできて光栄だよ。」

銀の長い髪をたらしめてジュリエットに笑いかける。

「突然ですが、これからの私の処遇を教えてくださいたいのです。父からは、人質として後宮に入ると聞かされていましたが……。」

ジュリエットは、かわいい乙女を装う。

「そのことですが、あなたにはしばらくこちらの屋敷に滞在していただきます。」

「！」

「あなたも。陰謀渦巻く後宮にすぐ行かれるよりも、こちらにいた方がゆっくりできますよ。」

「それは、皇帝は私のようなものが傍にいないことを不快に思われると言つことでしょうか？」

ジュリエットは、あえてがっかりした様子で装う。長年諜報部にいるジュリエットにとって演技はお手の物である。

「いえいえ、ただこちらの準備がまだ整っていないだけですよ。しかし、意外でしたね。あなたのような女性は後宮に自ら行きたがるような事はあまりないのですが…。それとも、何か特別な事情があたりでしょうか？例えば…、脱走を考えているとか？」

そう言いながら笑顔を見せるジュールバントに見せるパールバントを見て、さすが帝国宰相と内心想ったが、それをおくびに出さずジュールバントは答えた。

「後宮には、同世代の女の子が多くいると聞きました。今まで、田舎で養生していたため同世代の友達がいません。今、私の話し相手になってくれるのは侍女のアリアだけです。もっと、お友達が欲しいです。」

不意をつかれたように、パールバントは目をみはり答えた。

「では、そう皇帝にお伝えしましょう。ところで、しばらくワーム男爵はこちらに伺うことができせん。代わりに、こちらにいるフランシスに後を任せることにしました。」

そうパールバントが言うと、フランシスと言われた少年はジュールバントに軽く会釈をした。

「こちらこそ、よろしくお願いいたします。フランシス殿。」

ジュールバントは、笑顔で笑いかける。すると、よろしくお願いしますと小さな声でフランシスが答えた。

(早く後宮に連れて行ってもらいたい！)

ジュリエットの頭の中にはもうすでに脱出計画で一杯である。

しかし、パールバン公爵と話したあの日以降、ここ一カ月ワーム男爵が数回訪ねてきただけで他の訪問者はいない。

しかも、忠実なフランシスという番犬までつけられてしまったため、この場所からも脱出不可能である。

このフランシス実は、少年伯爵で本人だけでなくいつも護衛の兵士が周りをとり囲んでいる。彼らはつわもので、剣に腕のおぼえがあるジュリエットでも相手にするには苦労しそうである。

しかも、成功するかわからない。むしろ、仲間のいる後宮経路で逃げる方がずっと楽である。

そんな風にジュリエットが思っていた矢先、パールバン公爵が
恐ろしい知らせをもって現れたのである。

要人（後書き）

ワーム男爵の正体判明。

養女

「あなたを私の養女にしたい。」

そうパールバン公爵が突然言った時は、ジュリエットは驚愕のあまり目を見開いた。

「養女？」

ジュリエットが聞き返す。

「そう、養女です。私は、まだ独身で娘がいません。さらに、一人っ子で兄弟がいません。従兄弟も男しかいません。つまり、現在我が家で皇帝に嫁げる女子がいないのです。ですから、メソポタ王国のワールンベルグ子爵の娘マリアとしてではなく、メレヌス帝国の宰相パールバン公爵の養女マリアとして嫁いでいただきたいのです。」

「…。」

ジュリエットは、思わぬ申し出に驚きを隠せない。

「パールバン公爵の養女マリアとして嫁ぐということは何か政治的な思惑があるのですか？」

ジュリエットは聞き返す。

「あなたは、なかなか鋭い女性ですね。そうです。今は、皇帝の側近で宰相をさせていただいている私ですが、今後娘を差し出すこと

で権力を得ようとする輩が我が国にいます。現在、非常に政権は安定しています。この現状を崩すことは我が国にとってあまりよろしくないのです。現在後宮には后妃になれる身分の女性はいません。ですから、私の養女として嫁げば、ワーレンベルグ子爵の娘マリアとして嫁ぐよりも、公爵令嬢という身分で嫁いだ方が後宮での待遇もよいし、もしかして后妃になりうるかもしれないです。

突然湧いてきた思わぬ提案に、ジュリエットの心は右往左往していった。ですが、公爵令嬢なんかになってしまったら、さらに脱出は難しくなってしまうだろう。そう、ジュリエットは思った。

「」。私は、メソポタ王国のワーレンベルグ子爵の娘マリアであることを誇りに思っています。ですので、今の身分のまま結構です。

ジュリエットは、そつなく断ろうとした。

「本当に、この提案を受けていただけませんか？」

目をギロギロさせながら、パールバン公爵が聞き返す。

「はい。」

ジュリエットが、答える。

「私の養女になっていただけなら、あなたにはこの場で死んでもらいます。」

そういつて、パールバン公爵はなにか怪しげな瓶をポケットから取

り出した。

「死んでもらうっ？はっ？何のことですか？」

思わぬ展開にジュリエットの頭はついていけそうになかった。

過去（前書き）

ジュリエットの回想です。

過去

私、ジュリエットは、かつてマイスナー公爵家の一人娘で、母親はローゼン公爵令嬢だった。

いとこのミシエルとは、誕生日が一日違い。

母親同士が仲がよかったということもあり、生まれた場所も一緒であった。もつとも、ミシエルの母親は、私達が生まれてまもなくしてなくなったが。

そして、いとこ同士ということもあり、性別こそは違っていたが、顔や声は良く似ていた。

ミシエルは、母にとって甥にあたるということもあり、いつも一緒にいたため、2人は仲良しだった。

そして貴婦人にはあるまじきことであったが、ジュリエットはよくミシエルと剣の稽古をしていた。

そのおかげか、今ではジュリエットこと偽ローゼン伯爵は、メソポタ王国でも有数の腕前の持ち主になった。

そして、惨劇は7年前に起こった。

当時、王都のマイスナー公爵邸には、当時、お父様、お母様、おばあさま、伯父さま、ジュリエットの5人で暮らしていた。その日は、ミシエルも家に泊まりに来ていた。

深夜、突然上の階の両親の寝室から悲鳴が聞こえた。

その日ジュリエットと侍女のエルザとミシエルとは、夜遅く3人でジュリエットの部屋でカードゲームをして遊んでいたため、異変にすぐ気付いた。とつさに、危険を感じ取った3人はジュリエットの部屋の隠し扉に隠れた。その隠し扉は、実は特別な構造になっておりさらに隠し扉の中にもうひとつ隠し扉がある。奥の隠し扉には、1人分しか入るスペースはなく、ジュリエットしか入れなかった。そこで、ミシエルはジュリエットを気絶させて奥の隠し扉の中に隠し、エルザと手前の隠し扉に隠れた。

ジュリエットは、そこで気絶してしまったため、その後のことは覚えていない。

そして、目が覚めた時は全てが終わっていた。

過去2

ジュリエットが目覚めたのは、ローゼン侯爵邸のある一室である。

「ジュリエット様、ご加減はいかがですか？」

良く見知った、伯父上の侍女アニエスが心配そうに声をかけてくる。

「お父様、お母様、おばあさま、叔父様、それにミシエルは、どこにいるの？」

「…。それは、旦那さまからお話があると思います。」

ジュリエットがミシエル達についてきくとアニエスはつらそうな顔をして俯いてしまった。

2分後

「旦那様にお嬢様のことをお知らせしに参ります。」

と、言いアニエスが出て行った。

一体何があったのかしら？

お父様、お母様、おばあさま、叔父様、それにミシエルはどこに

いるの？

その夜、ローゼンがジュリエットの部屋にやってきた。

「ジュリエット、具合はどうかねえ？」

「ええ、良好です。ところで、お父様、お母様、それにミシェルはどこに？」

ジュリエットは、直球で伯父であるローゼン侯爵ロベルトに尋ねた。

「……ミシェル達はもうこの世にいない。」

「えっ。どういふことですか、ロベルト伯父様、何をおっしゃっているの？」

ロベルトの突然の発言にジュリエットはとまどいを隠せない。

「ジュリエット、本当のことだよ。ミシェル達は、亡くなったんだ。」

……

その後の会話は驚くはずにはいられない話であった。

ただわかったのは、あの夜、マイスナー公爵であったお父様の邸に強盗が入り、その日たまたま留守にしていた私の家族、お父様、お母様、おばあさまが惨殺されたこと、庭にミシエルとエルザらしき遺体があったということ、2人とも焼かれていたため、顔ははっきりとしていないがおそらく持ち物などから、その二人である可能性が高いということなどである。また、屋敷の使用人たちも1人残らず殺されていたため、誰が手引きをしたのかも検討がつかないようである。

そして何より驚いたことは、マイスナー公爵令嬢つまりジュリエットは亡くなったことになっているとであった。

承諾（前書き）

過去の回想からいったん現在に戻ります。

今回は、かなり短いです。

承諾

「少し、考える時間を下さい。」

ジュリエットは、とりあえず殺されたくないのでもう言うって時間稼ぎをすることにした。

「いいでしょう。3分程待ちましょう。」

そう冷静に答えるパールバン公爵の声をジュリエットを恐ろしく感じた。

ジュリエットは、心の中でさっと考えていた。

パールバン公爵のあの眼は、本気だ。

このまま行くと、私はここで殺されてしまうのだろう。

それは、非常にまずい。とりあえず、ここは条件をのむ。

脱出の難易度は上がるが、後宮に行けば逃げられるはず…。

そうしてジュリエットこと偽ワーレンベルグ子爵の娘マリアは、パ

イルバン公爵の養女になった。

承諾（後書き）

また、テストなのでしばらく更新できません。ごめんなさい。

森の館（前書き）

試験が全部終わりました。追試が3枚あったため、正月返上して勉強大変でした。

森の館

ジュリエットがパールバン公爵の養女になって一か月たった。

いま、ジュリエットはパールバン公爵領の森の館に滞在している。

「再来週の今頃はもう帝都にいるのですよねえ。」

侍女のアリアが名残おしそうにジュリエットに話す。パールバン公爵の養女になってから後宮にあがるための準備期間として、この森の館に滞在していた。森の多いサウザン領出身のアリアは、森に囲まれたこの森の館にすくなじんだためか、帝都に行くのは名残惜しいようである。

「そうね。もうすぐよ、もうすぐこの国から。」

ジュリエットが、そう言いかけたちょうどその時パールバン公爵がこちらに向かってやってくるのが見えた。

「来週この館をたつて帝都に向かいます。帝都まで、1週間ほどかかるのでつくのは再来週になるといってお話は以前しました。…」

パールバン公爵がこれからのことについて話し始めた。

ジュリエットは、動揺を隠して答えた。覚悟はしていたが、これは相当危険な状況である。もはや後宮入りした後でなく、婚礼前に逃げ出さないと大変なことになる。

「では、出立までに完ぺきに準備をしておいてください。」

パールバン公爵はそう言い残して部屋から出て行った。

黄金の都

一か月後

「アリア、今から始めましょう。」

そう、ジュリエットは微笑んでいた。黄金の都と呼ばれるここメレヌス帝国の首都コテンバーグにふさわしい大胆な笑みで会った。

一か月前、公爵の領地から帝都向かう道でジュリエット達はとある宿屋に泊まっていた。その宿に酔ったことこそがジュリエット達に幸運をもたらすことになった。

公爵邸を出発してから3日後、チャンゲンという大きな都市の貴族御用達の月の宿と呼ばれる宿屋に泊まることになった。

ジュリエットは、この宿屋で一番良い部屋に泊まることになった。もちろんパールバン公爵よりもよい部屋である。この部屋には、7つの小部屋がついており貴人用と呼ばれるのに充分ふさわしい部屋であった。この小部屋には、専属侍女のアリアの他に公爵邸から連れてきた3人の侍女、ルイーゼ、アメリア、アンナがともに泊まることになった。警護の者は部屋の外にいるものも部屋の中には5人である。この宿は、アンナの父親が経営しているということも道中

で聞いたのだった。アンナは、貴族ではないものの富豪の令嬢で花嫁修業の為に公爵邸で侍女として働いていたのだ。

「アリア、ルイーゼ、アメリカ、ここに書いてあるものを買いに行つてちょうだい。」

そういつて、ジュリエットはアリアがまとめた欲しい物リストを三人に渡し、買い物にいかせた。

#####

「アンナさん、あの3人は外に使いにやりました。今から今後のことを話しましょう。」

そうジュリエットは、アンナにささやいた。

「ところで、その前にもう一度見せてくれない？」

少し警戒しながら、アンナが言った。

「いいわ。」

ジュリエットは、答えるや机の上にある羊皮紙にメソポタ王国情報部の紋章を描いた。この紋章は、国王と諜報部の幹部しか知らない極秘情報である。さらに、紋章の下に自分の階級を表す花の絵を描いた。もちろん、本来の階級でなく、侍女として潜入する際に必

要な仮の階級ではあったが…。

「そして、証は？」

そう言われると、ジュリエットは服の中にしまっているガラス玉のついたネックレスをみせた。このガラス玉、よくみると中に情報部の紋章が彫ってあるである。

「あなたは、潜入17部隊総括副隊長のジュリエットで間違いなさそうね。」

「そうよ。紋章は事前に調べておいてくれたの？」

「ええ。」

「では、今度はあなたの証を、それを見せて頂戴。あなたの証を。」
ジュリエットに言われて、今度はアンナが同じようにガラス玉をみせた。

「これは、メレヌス帝国チャンゲン支部長の証。あなたなら信用してよさそうね。では今から作戦会議しましょう。」

こうして私は、マリアと決めた作戦を秘かにアリアに教え、実行し

たのであった。

黄金の都（後書き）

試験でしばらく更新できなくなります。ごめんなさい。

作戦中（前書き）

ジュリエット達脱出の全貌が明らかに…。

作戦中

作戦実行日

「アリア、今からいくわよ。ではあそこで待っていてちょうだい。」

「はい、ジュリエット様。では、健闘を祈ります。」

アリアは、お茶目にウインクして出て行った。

30分後、パールバン公爵令嬢マリアは侍女とともに突然消えた
と大騒ぎになるのである。

翌日、

「アンナ助かったわ。これから、メソポタ王国までお供してもらおう
なんて。悪いわね。」

ジュリエットは、ほっとした雰囲気
でアンナに話しかける。

「いえ、かまいません。くれぐれも、お二人とも女性であることが
ばれないように気をつけてくださいねえ。」

アンナは、馬車の向かいの席に座りながらにっこり笑いかけた。

そのころ、帝都のパールバン公爵では

「あの二人は、どこに行ったんだ？誘拐か？とにかく二人を探すよ
うに！」

パールバン公爵は部下に命じジュリエット達を探させた。

しかし、門や裏口からでた気配はない。

いったいどこから二人は消えたのか？

自分から逃げたのか、それとも誘拐されたのか？

おそらく後者だろう。

なぜなら、マリアの身元ははっきりこちらはわかっている。

そして、念のためにワーレンベルグ子爵邸に部下を向かわせた。

一か月後、なんとかアジアン公国に着いたジュリエットは、国境付近のメソポタ王国の情報部の隠れ家にいた。

数刻前

「礼儀作法は言うまでもありませんでしたが、こんな短期間で我が国の歴史をおぼえられるなんてさすが公爵令嬢ですね。と、ドリトル先生も言っていましたよ。」

そういってお茶を飲みながらニコニコ笑いかけてい来るのは、アジアン公国で知り合ったワーム男爵である。

帝都に来てから毎日彼はジュリエットのところに遊びに来ていたと、いうより監視に来ていた。

ワーム男爵の話によると、彼はパールバン公爵ほどの権力はないけども皇帝と面識があり、今回ジュリエットの様子を見てくるように皇帝に頼まれたそうだ。いきなり親しげに訪ねてきた男爵に最初は警戒していたジュリエットだったが、事情を聞いて今ではこうして仲良くお茶を一緒にいただくまでになった。

「ありがとうございます。」

ジュリエットは、いつもとかわらぬ笑顔で笑いかけた。

しかし、今日のジュリエットはさりげなく会話を早く終わらせようとしていた。そのことをワーム男爵に気づかれぬように慎重になりながら…。

30分後、ワーム男爵がそろそろ帰りますと行った時は心の中はウキウキになっていた。これでやっと帰ってくれる。そういっているものように立ちあがると、いきなりワーム男爵に抱きしめられた。突然のことに驚き何もできないでいるジュリエットに対し、一層力強く抱きしめられる。そして…

「あなたが、好きです。」

そうジュリエットの耳元でささやいて軽く耳にキスをして去って行った。

作戦中2

あなたが好きです…。

そう言われていたことに対してジュリエットはしばらく啞然としていた。

しかし、今はそんなことを考えている場合ではない。すぐ脱出しないと…。と、思い直し寝室に向かう。1人になりたいと言って人払いし寝室はジュリエット1人だけである。そして、隠し場所からベットの下に隠しておいた公爵邸の警備兵の服を着、寝室の壁に飾ってある大きい絵を額縁ごとはずす。すると、青い小さな隠し扉がある。青の隠し扉の鍵は事前にアンナの部下が外しておいてくれたのだった。青の隠し扉を押すと、先の見えない階段のような通路があった。ジュリエットは右手に持っていた小型の懐中電灯を入口に置き、今度は扉の中から後ろ向きに絵を額縁ごと持ちながら絵を掛け直した。そして、青い扉を閉め、扉の内側にそれまで来ていたドレスを隠し通路の中を全速力で進んでいった。

30分後、登ったり下ったり分岐した通路を選びながら進みつつ通路のとある出口に着く。それは、公爵邸の3軒となりの家の食糧庫の床につながっていた。到着した、ジュリエットは、天井を力いっぱい押す。すると、天井ははずれ、頭上にアンナの顔が見えた。

「さすが、ずいぶん早かったね。」

アンナは、ややほつとした様子でジュリエットを見下ろしている。

「アリアの方は、大丈夫なの？」

ジュリエットは、マリアの手を借りながら通路から上った。

「ええ、アリアさんは、買い物のふりをして裏門の外に出て、近くに待機していた私の部下が先ほど連れられて合流場所まで逃げたはずです。そろそろ、貴女ご不在がわかってしまう頃です。幸いしばらくは、ここに人がこれないようにしています。これに着替えて、あの緑の棚の後ろにある扉から待従の恰好で逃げてください。次の地点まで一本道ですので、迷わないと思います。」

そういつてアンナは、空の棚を持ちあげ、中の扉をあける。

「了解。後は任せたわよ。」

ジュリエットは、次の合流地点に向けて出発し、その間にアンナがジュリエットが出てきた出口の下に事前に用意していた石を出口がふさがるまでいれ、さらに出口である床を修復、その上に今日来たばかりの小麦粉の入った袋をおく。さらに、ジュリエットは入って行った緑の扉を閉め、棚をもどし、事前に抜いてあったものを元に戻す。その間約3分。迅速にアンナは片づけて出て行った。

そして、ついにジュリエットがアリアとの合流地点に着く。

「アンナさん、ジュリエット様が到着しました。」

アリアの嬉しそうな声が聞こえてくる。

「さすが、ずいぶん早かったね。」

アンナは、ややほっとした様子でジュリエットを見下ろしている。

「アンナこそ、よかった……」

あれから、3回隠し通路を通り、途中で馬車に乗り換えここまで到着した。はじめの待機場所には、アンナがいたが、あれからアンナには会っていないかったのでジュリエットもアンナも互いが気になっていたのである。無事を確認できてお互いほっとしていた。

「ところで、パールバン公爵邸は、今どうなっているの？」

ジュリエットは、いずれは聞かなければならないことの確認を急いだ。

新たなる希望（前書き）

いったん陰謀の頃のロベルト達の会話に戻ります。

新たなる希望

ロベルトは、今聞いたミシエルの乳母マーガレットの話に驚きを隠せない。

「では、ミシエルとエルザはもうこの世にはいないということか。」

ロベルトは、落胆してその場に崩れ落ちた。

「旦那様、大丈夫ですか？」

マーガレットは、心配そうに横からロベルトを支えていた。

「ああ、何とか。では、今まで私達がジュリエットにさせていたことは道化でしかなかったのか。」

ロベルトは、かすかに嘲笑いした。

「いえ、あの方だけはミシエルの代わりができます。」

マーガレットは、はつきりと話し始めた。この国は、双子は不吉とされ片方は生まれてすぐ殺されてしまうのが常であった。そして、ロベルトの妻は双子を生んだのだった。その双子がジュリエットとミシエルである。

「では、私の妹のエリザベスの子供はどこにいったんだ？」

「死産でした。」

マーガレットの言葉にロベルトは驚きを隠せない。

「原因は、エリザベス様の乳母と侍女にあります。その乳母は、誰かの手の者になりエリザベス様に毒を盛りました。そのせいで、エリザベス様は転倒し結果的には流産することになり。子供が産めない体になってしまったのです。そして、流産したことはその場にはたものしか知りません。そして、同じ時期に自分の兄の子、ましては双子を身ごもった王女がいた。この二人が何をしたのかこれだけでわかると思いますが…。」

「まさか…。」

ロベルトは、信じられないという顔でマーガレットを見た。

「今まで話したことはすべて本当です。国王は、後継者を作りことができないとすでに国中の人が知っております。この国は、帝国やその他の公国などと違い女子にも王位継承権があります。ですから、もうミシエルいいえジュリエット様の本当の性別を公開して、正式に王太子となってもよいと思います。」

「マーガレット、そなたはなぜ今頃になってこんな話を？」

「それは、このことは他言無用といわれましたが、亡きお嬢様、いや奥様とエリザベス様が自分たちの両方が亡くなり、またミシエルが亡くなった時にジュリエット様とロベルト様には本当のことを伝えるように言われていましたので。ただエリザベス様の亡くなり方があまりにも悲惨であり、私は今まで立ち直ることができませんでした。しかし、最近アロー様にミシエルの搜索グループに加わるように誘いを受け改めて現実に帰りました。そこでエリザベス様やお嬢様の遺言を全うしなければと思い、今回告白することにしました。」

今まで、黙っていて申し訳ないです。」

マーガレットは、その場で深々と謝罪した。

その姿を見つつ、ロベルトは今は亡き妻と妹について思いをはせていた。

妻と妹は、親友同士であったがまさか2人で私に秘密にしていることがあったとは！

そして内容が内容だけにショックも大きかった。

ジュリエット、早く帰ってきてくれ。

そう心のなかでロベルトは叫んでいた。

新たな希望（後書き）

また、しばらく更新できません。しばし、お待ちください。

搜索(前書き)

お久しぶりです。

搜索1〜3にする予定のものを改訂してまとめました。

搜索

「公爵閣下、ワーレンベルグ子爵の娘が見つかりました。」

そうメソポタ王国に潜入している皇帝の部下から連絡を受け、パールバン公爵はジュリエット達失踪の1カ月後にワーレンベルグ子爵の領地マイセンを訪れた。

「これで、これ以上あの方から何も言われずにすむに違いない。」

あれから1か月、マリアという養女を得て今後の政治基盤も安定したと思った矢先の失踪で公爵も苦笑を隠せないで過ごしていた日々も今日で終わりを迎えるはず。そう思いほっとしつつ、ワーレンベルグ子爵家本邸の門を空ける。すると、案の上マリアが……。

「ワーレンベルグ子爵はじめから説明してほしい。この娘は何者なんだ？」

パールバン公爵は顔は笑っているが、聞く方がぞつとせずにはいられない冷たく鋭い声でワーレンベルグ子爵に聞く。

「私の娘でございます、公爵閣下。」

ワーレンベルグ子爵は気まずそうに答える。

「確か、そなたには娘は一人しかいないと聞いていたが……。隠し子でもいたのか？今までそんな報告はなかったのだが……。」

「それは……。」

パールバン公爵の質問にワーレンベルグ子爵は答えに詰まり困っていた。

すると、その場にいた娘が驚きの入れかわりについて話し始めた。

「というわけで、今回は私の代わりにメレヌス帝国に嫁いだ侍女の行方は分らないのです。」

娘は、子爵と違って特に動揺をみせず話している。この様子を

みて、今回の入れかわりはおそらくこの娘が主導になったのに違いないとパールバン公爵は心の中でつぶやいた。

「この侍女の身元は？」

「それがよくわかりません。カイル將軍邸の執事からの紹介状を持っていましたので身元は確かだと思いますが……。ただもしかして……。」

「もしかしてとは？」

パールバン公爵は娘の奥歯に何か挟まったような言い回しを若干不快に感じながら聞き返す。

「彼女は、情報部の人間かもしれませぬ……。」

「……。情報部の人間？」

パールバン公爵とワーレンベルグ子爵の驚きの声が重なった。

「どうということだ。情報部の人間がワーレンベルグ子爵邸に入り込んでいたというのか……。」

パールバン公爵の鋭い声で本当のワーレンベルグ子爵の娘マリアに話す。

「はい、この絵が彼女の部屋に残されていたのです。見て下さい、閣下。」

「マリアの見せた紙には、紙には鈴蘭の花と横に2と小さく番号が書いてあった。」

この紙の意味は、ごく一部の人にしかわからない。鈴蘭の花は、メソポタ王国諜報部の国内専門の特殊潜入部隊か潜入部隊幹部のキーフラワーである。そしてこの2は、隊内での序列を示すもの。ここでいう2番とは、副隊長のことである。もちろんこのことを知っているのは諜報部の人間のみとされているが、パールバン公爵はかの国に放っているスパイよりその情報を入手していたからわかったのである。

「メソポタ王国の潜入部隊か。もしかして我々の関係を国王はもう見抜いているのか！」

「わかりません。しかし、気付いている可能性はあります。用心するのに越したことはありません。」

冷静にマリアは答えている。マリアをみながらパールバン公爵は1つ疑問を感じた。そこで、マリアにきいてみる。

「ところで、なぜあなたはこの暗号について知っているのですか？」

「私の母の侍女が王国諜報部の国内専門の特殊潜入部隊だったので。彼女はすでに亡くなっていますが、5年前までこの屋敷におりました。彼女は、最初私の母方の祖父を探るように言われて母の侍女になったそうです。しかし、祖父は15年前亡くなり、父が婿に入り祖父の後を継ぎました。その頃、家族も早くに亡くして独り身彼女は同じ部隊にいた恋人がなくなり、それから除隊して以前どおりこの屋敷に務めていたが、母に偽りの姿を見せ続けるがつらくなり、自殺しました。」

「そんなことは、私は聞いてないぞ！なぜ黙っていた。」

ワーレンベルグ子爵がと途中で会話を遮る。

「母の遺言だからです。お父様。母は、彼女の秘密を墓場まで持つて行くようにいわれたのです。それに今は公爵閣下の御前です。話後は後にしてください。」

いささか不満そうだが、子爵は引き下がった。

そのタイミングをみて、パールバン公爵が話し始める。

「もう結構です。ところで、今回の件の埋め合わせに娘は連れていく。」

「待ってください。今から何でもします。どうか娘だけは。」

ワーレンベルグ子爵のわらをもつかむようなすがる声が響いていた。

「…。公爵は必死にあなたを探しているわ。」

アンナの説明が終わる。

「では、私達は慎重にメソポタ王国に帰らないといけないわね。」

それからジュリエットの指示でアジアン公国しばらく滞在することになった。

一カ月後

「君の正体がばれないようにしなければ。」

「ええ、できれば国に帰る前にマリアとアリアと別れたい。けれども、彼らの安全面も確保したいと思っています。特にマリアの家族が心配である。帝国へ放っているスパイにも連絡してその旨を伝えていざとなった時には守って欲しい。まあ、私とマリアの接点も旅の一時だから大丈夫だと思うが。後、王国のアリアの家族も安全な場所に情報部に匿ってほしい。」

ジュリエットは、目の前の紳士に向かって淡々と話していく。

「わかりました。ではあなたは今ジュリエットという諜報部員で次の仕事があるのでこれ以降は我々が保護すると伝えておきます。では、私達が用意した馬車で今から王国に向かって下さい。」

「わかった。ありがとう。」

ジュリエットは、今後のためにつつておく手を考えていた。アジアン公国の隠れ家にはローゼン伯爵の配下であるミュラー伯爵がいた。ミュラー伯爵は、40代後半とは思えないほどダンディなおじさまである。しかし、彼はジュリエットのことまでは知らない。そこで、ジュリエットは、男装したまま彼と2人の会見を希望し今対面しているのである。

「では、幸運をミシエル様。」

その頃帝都では…

「まだ見つからないのか！」

そうパールバン公爵に怒鳴る声が皇帝の執務室から聞こえてくる。

「はい、偽マリアはローゼン伯爵率いる諜報部の一員であることはわかりましたが、他のことはわかりません。それは、あなたが独自に放っているスパイからの情報でも聞いているではありませんか？」

「ああ、でももう一カ月だ。偽物でも諜報部員でも関係ないさ。早く見つけてこい！」

「見つけてこいと言われても…。とりあえず、捜査は続けますが…。しかし、彼女がローゼン伯爵の手のものとなると厄介ですねえ。」

パールバン公爵はため息をつきながら答える。

「ローゼン伯爵は、国王の甥で次期国王候補でもあります。彼にワレンベルグ子爵との関係がばれてしまうと今後今以上にやりにくくなります。そして万が一の確率でかの公爵との関係がわかってしまい、先代がおこしたことはいえ王位継承者を暗殺しようとした

ことは我が国のイメーダウンにおおいに働きます。」

「そうだな、あの公爵は、自分の姪さえも殺してしまうような極悪な男である。注意するには越したことはない。」

そう話す皇帝の声は、パールバン公爵には聞こえなかった。

戦争の始まり（前書き）

遅くなって申し訳ないです。

戦争の始まり

1年後……………

「カイル將軍、ローゼン伯爵がお見えになりました。」

そう半年前に総司令官に就任したばかりのカイル將軍に、ジユリエットことローゼン伯爵の到着を伝えているのは、カイルの副官のジヨージである。

「では、ミシエル大佐を通してくれ。」

事の始まりは9か月前

メレヌス帝国とメソポタ王国の間にあるフォン国とマージエン国
の間に流れるビタミン川の利権争いが始まったことにある。はじめ
はフォン国とマージエン国の2国間の争いであった。2国間は歩み
寄るための会談を設けたが交渉は決裂、2国間の戦争になるのには
1月もかからなかった。この2国、フォン国とマージエン国はそれ
ぞれメレヌス帝国とメソポタ王国の属国であり、かの2大国の支配
を色濃く受けている。

よって2国間の戦争は2国間にとどまらず宗主国のメレヌス帝国と
メソポタ王国を巻き込んだ大戦争になってしまったのであった。

「ミシエル大佐、メレヌス帝国の指揮官は誰かわかったか？」

カイル将軍がジュリエットに尋ねた。

「たぶんだが、帝国の宰相パールバン公爵らしい。」

「パールバン公爵??? そんな大物が今回の戦に関わっているのか
! ! ! !」

そう大声を出して驚いたのはマージエン国のスイ元帥である。彼の家は、マージエン国の由緒ある軍閥に生まれ、代々マージエン国の軍隊を率いている。彼らを負かしたことがあるのはメソポタ王国の軍隊だけである。このスイ元帥は、カイル将軍と同じ20代後半と若い。

「ああ、この戦争はおそらく長引く。だから、長期戦のつもりでかまえていた方がいい。」

「勝つ勝算は？」

今度はカイル将軍が口をはさむ。

「今のところは、五分だ。潜入部隊の情報によると、敵国に情報を流しているのマージエン国貴族がいるらしい。しかも、その人物はこの国内でも相当の影響力を持っているらしい。その貴族からこれ以上の情報をながされるとまずい」

ジュリエットは淡々と話しているのに対し、スイ元帥、カイル将軍共に驚きを隠せない。

「裏切り者？それは…。」

「そのひとについては後で話すよ。それより2人にやってもらいたいことがあるんだ。」

「やってもらいたいこと？」

2人ははじめは首を傾げたものの、その後ジュリエットの方に向き直りなおり話を聞いたのである。

戦争の始まり（後書き）

話が飛びすぎていて申し訳ないです。

策略

「パールバン公爵、お食事を持ってまいりました。」

「そこに置いておいてくれ。後で、食べる。」

「わかりました。では、召し上がる際はまたお呼び下さい。毒身をお願いいたします。」

そういうと、パールバン公爵の侍従は去って行った。

ここは、メレヌス帝国側の陣営。総大将のパールバン公爵の天幕である。

侍従が去った後、パールバン公爵は普段は執務室で行っている仕事のうちどうしても目を通しておく必要のあるもののみ選別してとりかかっていた。そして一時間後そろそろ休憩して食事を食べようと侍従を読んだ。来るまでの間この半年の出来事を思い返していた。

属国であるファン国の問題に宗主国として介入したという理由で今回参戦することになった。今回の戦争への参加すれば間違いないメソポタ王国も介入してくることを予想するのは容易だった。そのため、一部を除いて指揮官の任を嫌がるものが大半だった。それなのに今回の戦争の総大将に志願したのは、一年前の失態を埋めるためである。結局、偽マリアを見つけたことはできなかった。今なお捜査しているにもかかわらず、わかったことはジュリエットという名の諜報部の一員であるということと、一緒にいた侍女の家族が皆行方不明になっているということの2点だけである。今なお調査は進めているが、おそらくこれ以上のことはわからないだろう。メソポタ王国諜報部を現在率いているのは国王の甥ローゼン伯爵であるという。そして今回の戦争の向こう側の指揮官は彼の親友とも

言われているカイル將軍である。彼から何か諜報部に関する情報を引き出せるかもしれない。おそらくほとんど無理だろうが…。ピタミン川をはさんで小競り合いしているのも今のうちだけである。全面戦争に突入する前に一度彼に探りをいれてみようか…。

「それにしても遅い…。」

パールバン公爵は呼ばれたらすぐ来ると言っていた侍従がなかなかこないことに焦りを感じながら天幕を出た。すると、見張りの兵士が眠っていた。

「おい。起きろ。」

そうパールバン公爵がゆり起しても起きる気配は全くない。完璧に熟睡しているようである。どうしたことかと今度は別の天幕の副官を起こしに行った。すると、目がくらむような光景が広がった。天幕内の兵士は皆先ほどの見張りの兵士同様副官でもある侍従が眠っている。もちろん彼だけでなくその場にいた全員が眠っている。パールバン公爵は、侍従をなぐってゆり起した。

「ん…。」

「気づいたか…。」

「公爵閣下???」

「いつまで寝ているつもりだ!」

その公爵の声に驚いて侍従は起きた。そして現在の状況を把握しよとまわりを見渡す。

「ピーーーーー。」

直後大アラームがなった。この後に何かと思い皆起き上がる。

大きな音が気になったパールバン公爵とその侍従が外に出ると、大半の武器庫や食糧庫が火に包まれていて、しかもほとんど焼け落ちてしまっているのが見えたのである。

そのころジュリエット達は…

「さすが、ローゼン伯爵。敵軍の武器庫と食糧庫を壊滅させるなんて！」

そう、感嘆の声をあげているのはスイ元帥である。

「さすが、ミシエル大佐だ。ところで、どんな手を使ったんだ。後、俺たちに運ばせたこの荷物は何だ??？」

カイル將軍は川の下流を下りきり、これから海に入るところで今まで手に待っていた拳銃を下してジュリエットに聞いてきた。この小船に乗っているのは、ジュリエットとその配下のアランとフラン、カイル將軍、スイ元帥の5人である。そしてその前それぞれかなり

距離が離れているが三隻ほどの船が川を下ったはずである。それぞ
れ大きさは大中小と前から順に小さくなっている。
そして、ジュリエット達が乗っているこの船こそがもっとも小型の
貨物用の船であった。

「ここまで、来れば後は風と潮のながれに乗って30分でアスラン
の港に着く。では、着いたら至急陣地に戻りましょう。」

その日メソポタ王国の諜報部は、メレヌス帝国軍から武器と食糧
をまんまと盗み出すことに成功したのだった。

策略後（前書き）

恋愛ものつもりが軍隊ものに変わっている気が…。

もっ少ししたら、きちんと軌道修正するつもりです。

策略後

「昨日、不審な船が4隻も川の上流で見かけたというのに、今まで報告は何もなかったのか!!!」

そう副官である侍従に向かって激怒しているのは、パールバン公爵である。

「報告らしきものは、ナン將軍にしたものはいたそうです。けれども、…。」

「けれども、なんだ？」

パールバン公爵が先を求めた。

「ナン將軍は、川の近くの木で縛られているのが見つかりました。」

「どういふことだ！」

さらなる追及が始まる。

「どうやら、かれはメソポタ側にかどかわされていたようです。」

「どういふことだ？」

「將軍は、今回の戦で自分が指揮官に選ばれると思っていたようです。現に今までのことを考えると確かに彼が選抜されたでしょう。しかし、今回あなたが指揮官に立候補してしまった。皇帝の寵臣でかつて軍に所属して最年少元帥にまでなった閣下がいるといろいろ

と…。」

侍従の話をパールバン公爵は遮断した。

「もういい、わかった。何か重要なことがわかったら、また報告しに来い。」

そういうや否やパールバン公爵は、また自分の天幕に戻り人払いして考えた。裏切り者のせいだとんだことになった。この失態を皇帝がしたらどうなるかたやすい。

「公爵閣下、さきほど言い忘れていたことがあります。」

「なんだ。」

「先ほど、パールバン公爵をかどかわした相手がありました。相手は、ジュリエットという女諜報員のようです。」

「!?!?!」

「よい、下がね。」

そうパールバン公爵は言うのが精一杯だった。

ジュリエット…。その名前の諜報員と聞いてパールバン公爵は一つの可能性に思い至った。それは、皇帝の愛する偽マリアのことである。もし今回のことに偽マリアが関わっているとしたら…。思わぬところで、問題解決の糸口になるかもしれない。とにかくナイン將軍から話を聞かないと…。

「ロベルト、もう先が長くない。だから、後継者はミシエルに…。」

「待って下さい。その前にお話ししたいことがあります。」

そういつて人払いさせて国王の病室には2人きりとなった。

「話したいこととはなんだ？」

口火を切ったのは国王である。

「ミシエルのことです。」

「ミシエル？」

「はい、あの子はミシエルであってミシエルでない。確かに私の子供であったとも血が繋がっていないですが、あの子は女の子です。そして、本物のミシエルの双子の妹です。」

「双子！まさか…。」

「はい、今まで騙していて申し訳ありません。あの事件でミシエルは亡くなりました。その手がかりを少しでも残したくて…。」

「
∴。
」
「
∴。
」
「
∴。
」
「
∴。
」

沈黙が数分続く。

「もう良い。わかった。それでも後継者は、ミシエルいやあの子だ。あの子の本当の名前と性別を公表しよう。皇太子の就任式を行う。あの子を帰国させてくれ。」

「御意のままに。」

そういってロベルトは退出した。

戦の合間

「スイ元帥、あちらから停戦の要請がきました。」

そういつて書状を持ってきたのはスイ元帥の部下ミン大佐である。

「どうしますか、ローゼン伯爵。」

「あちらは大分困っているようだが、こちらとして停戦するよりこの機会に一気にたたいた方がいいねえ。まあ、裏切り者もわかったことだしねえ、ミン大佐。」

「!!!!」

ジュリエットことローゼン伯爵の言葉にその場にいたスイ元帥とカイル將軍は黙り込んでしまう。

「君の家だよねえ。情報を流しているのは。」

おかしいと思っただんだよね。停戦の要請がこんなに早くくるの。本当は向こうから停戦要請なんてまだきてないんだろう。こちらに停戦要請を出したふりをしてその間に向こうの立て直しをはかるつもりかなあ。」

「ミン大佐、なぜ君の家が…。」

スイ元帥は驚きを隠せない。ミン大佐の家は、スイ元帥の生家リンデンベルグ家に次ぐ軍閥の名家だった。

「彼を、捕えて牢にいれよ。」

カイル將軍の命令により天幕の外にいた兵の1人がやってきてミン大佐を捕える。

「さて今後の方針を考えよう。」

そうジュリエットが2人に呼び掛けた時国王からの使者が訪れた。

使者は、ジュリエットに向かって書状を渡す。

「至急、本国にお戻りくださいと、国王命令です。」

使者は、厳かにジュリエットに命を告げる。

書状を読んでいるうちにジュリエットの顔は青くなっていた。

未定

* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *

* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *

未定

* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *
* * * * *

10 (前書き)

陰謀の頃にさかのぼります。

+ + + + + + + + + + + + + + + +
+ + + + + + + + + + + + + + + +
+ + + + + + + + + + + + + + + +
+ + + + + + + + + + + + + + + +
+ + + + + + + + + + + + + + + +
+ + + + + + + + + + + + + + + +
+ + + + + + + + + + + + + + + +
+ + + + + + + + + + + + + + + +
+ + + + + + + + + + + + + + + +
+ + + + + + + + + + + + + + + +
+ + + + + + + + + + + + + + + +
+ + + + + + + + + + + + + + + +
+ + + + + + + + + + + + + + + +
+ + + + + + + + + + + + + + + +
+ + + + + + + + + + + + + + + +
+ + + + + + + + + + + + + + + +
+ + + + + + + + + + + + + + + +
+ + + + + + + + + + + + + + + +
+ + + + + + + + + + + + + + + +
+ + + + + + + + + + + + + + + +
+ + + + + + + + + + + + + + + +
+ + + + + + + + + + + + + + + +
+ + + + + + + + + + + + + + + +
+ + + + + + + + + + + + + + + +
+ + + + + + + + + + + + + + + +
+ + + + + + + + + + + + + + + +

1
0

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6818o/>

男装伯爵とメイド

2011年10月7日23時42分発行